

ヒトの「自己家畜化現象」と自然

「自己家畜化現象」とは、ヒトが自己をあたかも家畜のごとく管理する動物であるという認識から生まれた概念を指す。東京大学農学部の実良博氏によれば、1934年にドイツで生まれ、日本に最初に紹介したのは、京都大学霊長類研究所にいた江原昭善氏で、雑誌「自然」（1971年4月号）の誌上だったという。実はこの紹介文を、雑誌の発行早々に読み、強い衝撃を受けた。以来、この言葉は私の脳裏に焼きついている。しかし、専門学会のほうでは、「自己家畜化」というキーワードがいったん消えてしまったようだ。5年ほど前、「人類の自己家畜化現象と現代文明」（尾本恵市、国際日本文化研究センター）というプロジェクトが生まれ、自己家畜化を視点として現代文明下のヒトを理解することが試みられた。

ここでは、先生方を向こうに回して論陣を張るつもりはサラサラ無く、ふと思ったことを書く。

私が考える家畜は、牧場に放たれた家畜は幸せで、狭くて汚い小屋に閉じこめられた家畜はかわいそうだくらいの認識だ。鶏に例があるように、商品の生産性を高めるためには、「無駄な」エネルギーを消費しないよう、家畜を狭いところの閉じこめる。病気の発生、蔓延を防ぐために抗生物質を使う。こんな認識のなかで、狭いところに動物を密集させる行為が、私の関心を引いた。

ところが、ヒトはなぜだか自分から集まる。大家族が崩壊して、核家族が生まれ、家庭そのものは分散傾向にあるようだが、大都市の拡大は別に進む。土地の有効利用と称して高層アパートを建て、さらに人口密度が上がる。

世界に大都市はたくさんあるが、東京圏の人口集中は際立っている。ニューヨーク、ロンドン、パリの人口密度が、それぞれ9400、7600、8000人/平方キロであるのに対して、東京23区は16,000人/平方キロに達する。私は1950年から1980年まで埼玉県浦和市に住んだ。高校は都立、大学と勤務地が都内だったので、ずっと通勤ラッシュを経験した。仮に電車1平方メートルにつき4人が乗っていたとすると、人口密度は400万人/平方キロ。なんとも巨大な数だが、その「成果」として、たとえば港区西新橋一丁目の人口密度は、夜間の3200から昼間の647,600人/平方キロに跳ね上がる。

ヒトは自ら密集するものの、そのうちの何割かが、高密度の生活環境から精神的な圧迫を感じずらい。星、海、山、川、森林、花、鳥、昆虫などを求めて、自然、自然と大合唱する。ビルの屋上の庭園にトンボや野鳥が来たと感激し、休日には高い代価と時間を掛けて遠方へ脱出する。そこで「癒された」と満足して、また密集地に戻る。

しかし、最終的に大都会を脱出してしまふ人は、大都会に集まる人より少ない。田舎に産業が少なく、生活のためのお金を稼ぐ基盤が弱いという理由もあるが、私の過去の経験からすれば、

人がまばらで、自然にさらされる時間が長いと、背中が薄ら寒いのである。あんなに憧れた森の緑さえ疎ましくなる。これはまさしく「大都会依存症」の禁断症状だろうか。

ヒトの集中は、大都会から自然を排除していく。動物も、植物も、その生存が制限され、多くは消えていく。大気さえ排気ガスと廃熱に汚れ、透明度を失い、ヒートアイランド現象を起こす。もし、集中がヒトの「自己家畜化現象」の一面として、あるいは、ヒトの特性として生ずるのであれば、自然を求めてさまよう人類の姿は誠に矛盾に満ちている。
